

筑後国府跡

—第244次発掘調査報告—

平成24年（2012）2月

久留米市教育委員会

序

久留米市は筑後平野の中心付近に位置し、耳納山地の緑と筑後川の水など、豊かな自然に恵まれています。平成17年2月の広域合併後、平成20年4月には中核市となり、福岡県南地域の中心都市として発展しています。このような発展を築き上げてきた先人達は、多くの文化を創造し、市内各所にはその足跡である貴重な歴史遺産が多く残されています。

本書で報告する筑後国府跡は、昭和36年に九州大学が全国に先駆けて国府政庁における発掘調査を実施しました。昭和47年以降は本市教育委員会が継続して調査を行い、今年度で50年の節目を迎えます。これまでの半世紀に及ぶ調査成果は全国の官衙研究に貴重な情報を発信し、注目されているところです。今回の調査では、筑後国府が盛行した奈良・平安時代の遺構・遺物を中心に多くの成果が得られました。

今回の発掘調査とその成果を収録した本書の発行によって、地域の歴史解明、さらに文化財保護行政の理解や普及、生涯学習等に多少なりとも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査・本書の発行に際しまして、多大なご理解のもとにご協力を頂きました丸山建設工業株式会社や関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成24年2月29日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、宅地造成に先立ち丸山建設工業株式会社の委託を受けて実施した、筑後国府跡第244次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査ならびに調査に係わる事務は、久留米市教育委員会が主体となり、久留米市市民文化部文化財保護課の廣木誠が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、廣木・柁島ミドリ・山田治代が行った。また、本書に掲載した遺物の実測は廣木が行い、図面の浄書は廣木・神保公久・非常勤職員の米澤美詠子が実施した。
4. 本書に掲載した遺構写真は、6×7判で廣木が、遺物写真は6×9判で当課の塚本映子が撮影した。また、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（旧座標系）を基に作成し、図面の方位は座標北を示す。
6. 本調査の略記号はT K H244、調査番号は201104である。
7. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
8. 遺物観察表の凡例は下記のとおりである。
口径（長）・底径（幅）・器高（厚）の単位はc mである。（ ）内の数値は現存値または復元値を示す。色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1997年版）による。
登録番号は、久留米市市民文化部文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。
9. 本書の執筆・編集は廣木が担当した。

本文目次

I. はじめに	1
II. 筑後国府跡の立地と概要	2
III. 調査の記録	4
IV. まとめ	17

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、宅地造成に伴う事前の発掘調査である。平成22年10月8日、地権者より、久留米市合川町字広野178-3、179-1における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である筑後国府跡に含まれ、周辺では昭和54年度に第29次調査、同63年度に第84次調査、平成7年度に第132次調査、同17年度に第203次調査、同19年度に第219次調査などが実施されている。これらの調査では奈良・平安時代の多くの遺構が検出されており、対象地には筑後国府域内に展開すると予想される区画施設が検出される可能性が高いことが想定された。その後の確認調査でも遺構の存在が確認できたことから、造成地内の道路建設予定地について発掘調査が必要である旨を回答した。協議の結果、調査費用を原因者負担とし、平成23年4月25日に丸山建設工業株式会社から「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、平成23年5月16日に丸山建設工業株式会社と久留米市長榑原利則は「筑後国府跡第244次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。現地調査は、平成23年5月24日から7月1日に実施、出土品整理・報告書作成に係わる契約は平成24年2月29日までである。

2. 調査に係わる体制

調査委託：丸山建設工業株式会社

調査主体：久留米市教育委員会 教 育 長：堤 正則

調査総括：市民文化部 部 長：辻 文孝 次 長：佐藤光義

文化財保護課 課 長：立石雅文

課長補佐兼課主査：宮崎俊一 古賀正美 園井正隆

課 主 査：白木 守 事務主査：近澤康治

庶務担当：豊福早苗

調査担当：廣木 誠 整理担当：米澤美詠子

発掘調査臨時職員

大坪 進・栴島ミドリ・國武三歳・堤 淳子・深山智富美・堀江俊文・森山美千代・柳 鈴子
山田治代・良永洋子・吉村智子

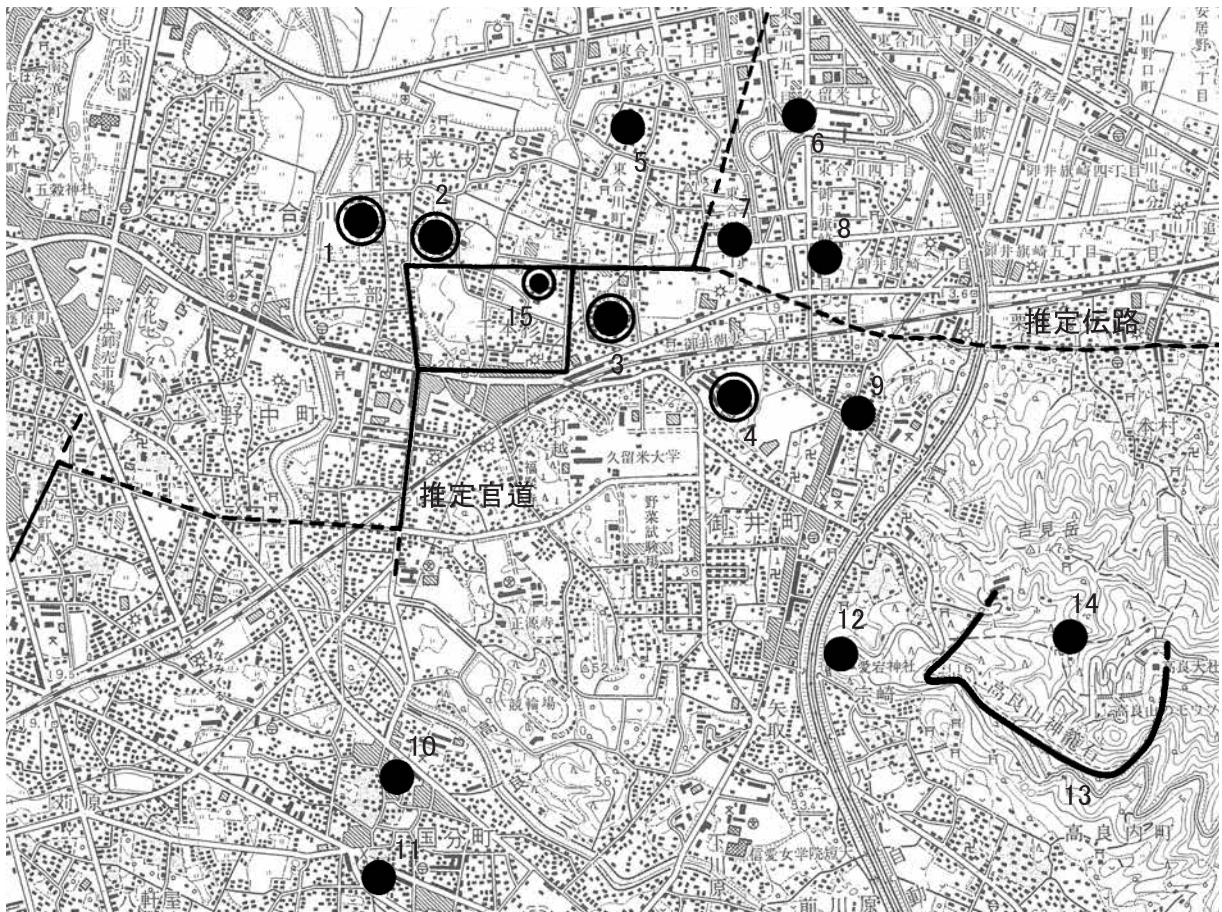
発掘調査整理臨時職員

永渕笑美子

Ⅱ．筑後国府跡の立地と概要

1．地理的環境

久留米市は、九州最大の穀倉地帯である筑後平野の中央に発達した中核都市で、交通の要衝に位置する。筑後国府跡が所在する合川町付近には九州縦貫自動車道をはじめ、国道210・322号線やJR久大本線などの交通網が発達している。久留米市域の北側近くには水を湛える九州一の大河、筑後川が西流して有明海へと注ぎ、南東側には緑豊かな耳納山地が聳える。筑後国府跡はこの耳納山地西端から北西へ派生する標高約15mの低位段丘上に立地し、東西1.0km、南北0.7kmの範囲に展開している。台地の南端は水縄断層系千本杉断層が東西に走り、断層によって形成された断層崖下には湧水地が点在する。これらの湧水は小河川となって台地を開析しつつ筑後川へ及ぶ。また、西端は高良山南麓に源を発した高良川が、東側は中谷川が流れ、北の筑後川、南の断層崖とともに国府城の四至を画す。国府の選地にあたっては、筑後川の水運と地理的立地の利便性が起因しているものと考えられる。



第1図 筑後国府跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

1. I期政庁 2. II期政庁 3. III期政庁 4. IV期政庁 5. 西小路遺跡 6. 下見遺跡
7. ヘボノ木遺跡 8. 神道遺跡 9. 二本木遺跡 10. 筑後国分尼寺跡
11. 筑後国分僧寺跡 12. 祇園山古墳 13. 高良山神籠石 14. 高隆寺跡 15. 第244次調査地

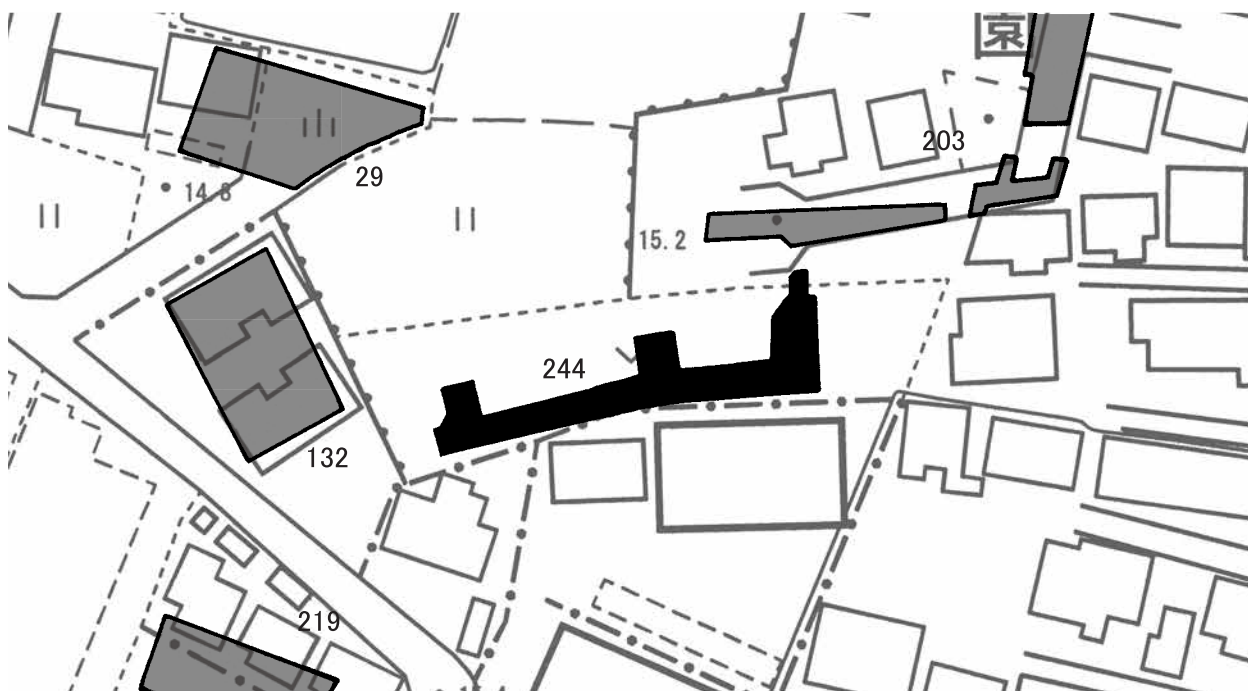
2. 筑後国府の概要

昭和36年、筑後国府跡において九州大学考古学教室による本格的な発掘調査が実施され、今年度で調査開始から50年の節目を迎えた。半世紀に及ぶ調査の結果、筑後国府跡の具体像が明らかになりつつある。特に、筑後国が成立する以前から官衙が設けられたこと、筑後国が成立した7世紀末頃から平安時代末の12世紀後半までの約500年間で御井郡内を3度移り変わったことは注目される。

筑後立国以前の7世紀中頃、前身官衙は田代地区に造営された大型の四面廂建物を中心に枝光台地西部に展開し、大溝や土塁を伴うことが判明している。7世紀末頃には、古宮地区において築地塀の内部に正殿・脇殿・前殿にあたる掘立柱建物群を整然と建て並べたⅠ期政庁が造営された。8世紀中頃になると、古宮地区から東へ200mの阿弥陀地区にⅡ期政庁が営まれる。Ⅱ期政庁は9世紀前半には礎石建物であったことが明らかとなっており、また、西脇殿や政庁前面の朝集殿的な建物群、築地塀、多量の古瓦も検出された。さらに、政庁から南東へ200mの位置には、国司館跡も確認されている。このⅡ期政庁は10世紀中頃に焼失したと考えられ、東へ600mの朝妻地区へ移転する。Ⅲ期政庁は一辺140m程の溝で区画された大規模なもので、北に八脚門・東西に出入り口を配し、区画内部に正殿・脇殿を設けていた。11世紀末になると、Ⅳ期政庁として南東へ400mに所在する横道遺跡へ移転し、『高良記』に見える「今ノ符」と考えられるこの政庁は、12世紀後半頃まで存続したようである。

第1表 筑後国府跡の変遷

	所在地	存続年代
前身官衙	久留米市合川町枝光台地一帯（中枢部：田代地区）	7世紀中頃～7世紀末頃
Ⅰ期政庁	合川町古宮地区	7世紀末頃～8世紀中頃
Ⅱ期政庁	合川町阿弥陀地区	8世紀中頃～10世紀中頃
Ⅲ期政庁	朝妻町三丁野地区	10世紀中頃～11世紀後半
Ⅳ期政庁	御井町横道地区	11世紀後半～12世紀後半



第2図 筑後国府跡第244次調査地点図（1/1,000）

※数字は調査次数

Ⅲ．調査の記録

1．調査の目的と経過

本調査地は、筑後国府跡Ⅱ期政庁に付随する国司館跡の東側に位置する。調査地の周辺では、第29・84・132・203・219次調査などが実施されている。これらの調査では、9・10世紀代を中心に多くの遺構・遺物が検出された。特に南側隣接地の第84・219次調査地では、筑後国府域に展開すると思われる柵列で囲繞された区画施設が確認されており、対象地内にもその施設が広がっていることが予想された。また、北西側に所在する第29次調査地では9世紀代の掘立柱建物が検出され、さらに、北東側に隣接する第203次調査地では推定官道から分岐する南北道路の存在が指摘されている。今回はこれらの成果を念頭に置き、遺構群の広がりを確認することを目的とした。

現地調査は、平成23年5月24日から重機による表土剥ぎを開始した。表土を除去した部分から遺構検出及び平板測量を実施し、略図作成が終了した箇所より遺構の掘削を開始した。遺構実測、写真撮影は随時行い、全ての遺構掘削終了後、6月23日には全体写真を撮影し、同日には久留米大学生の遺跡見学があり、約40名の参加があった。補足調査終了後の6月30日に埋め戻しを開始し、7月1日に全ての現地作業を終了した。個別遺構・土層断面図（1/10・1/20）は手測りで作製したが、それ以外の遺構実測はトータルステーションを用い、その記録は株式会社CUBIC製ソフト「遺構くんCubic」で編集・保管している。遺構の記録写真は、全体写真以外を廣木がカラーリバーサル・モノクローム6×7判で撮影した。



第3図 筑後国府跡第244次調査区全景（北上空から）



第4図 筑後国府跡第244次調査遺構配置図 (1/200)

2. 検出遺構

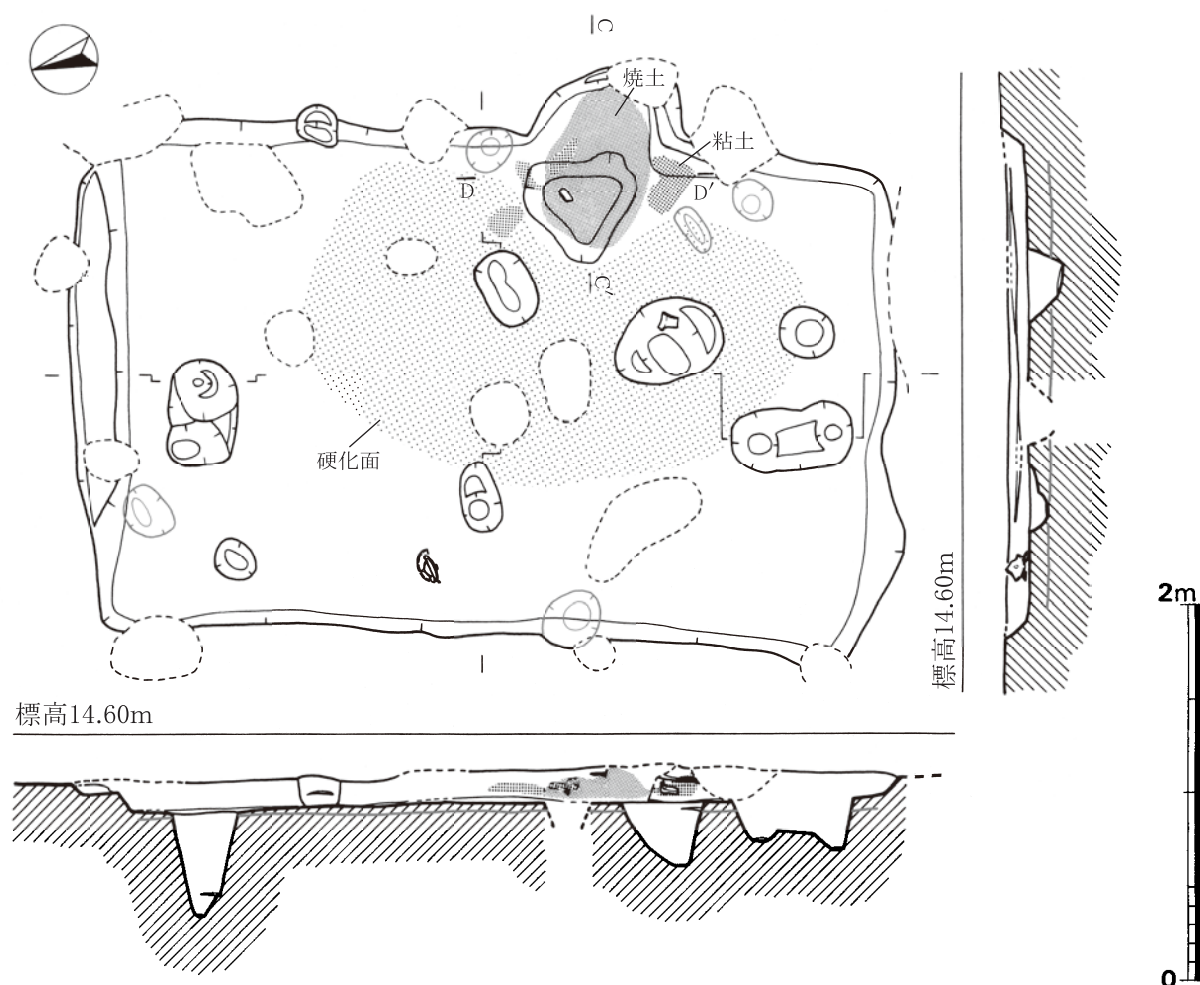
本調査地の周辺地形は、南東から北西へ傾斜している。対象地は畑地として利用されてきたため、一部遺構の削平や攪乱を確認できた。基本層序は、調査区西側では耕作土・床土が約0.3m、灰褐色の間層が0.2～0.3m、黒色の遺物包含層が約0.1～0.2mであるが、東側の標高が高い部分では遺物包含層の残存状況が悪い。遺構検出面である地山面までの深さは、西側で約0.7m、東側では0.2m程度を測り、検出面の標高は西側で約14.4mである。

検出遺構は、竪穴建物2棟、溝2条、土坑3基、ピット群で、遺構は西側に密に分布し、東に行くに従い疎らになる。ここでは、これらの主要遺構について報告する。

竪穴建物

S I 1 (第5～8図)

調査区西端で検出した。SD10に先行する。平面形はほぼ長方形であるが、四隅が若干丸みを帯びる。規模は長軸4.4m×短軸2.7m程で、床面までの深さは約15cmを測る。埋土は黒色土で、上層の一部に焼土粒・炭化物を、下層に黄褐色・暗褐色を呈する地山の粒状土・ブロック土を含んでいた。



第5図 S I 1 実測図 (1/40)



第6図 S I 1床面検出状況（北東から）



第7図 S I 1カマド検出状況（北西から）

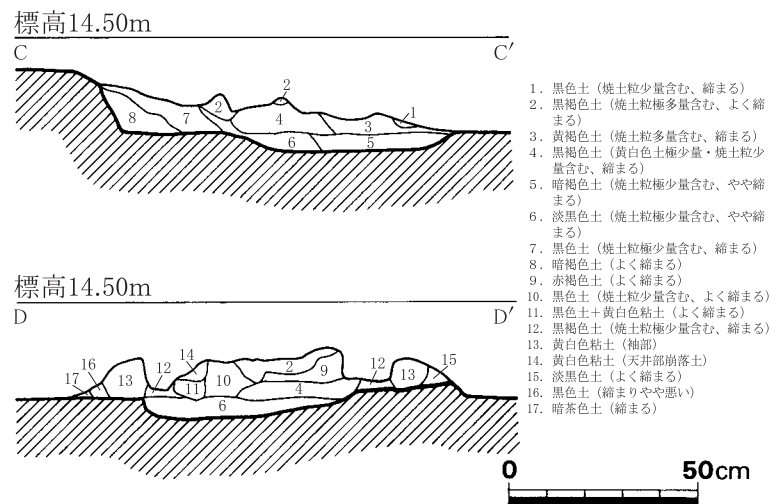
建物内では壁溝や明解な柱穴を確認できなかったが、カマド及び硬化面を確認した。カマドは東壁中央のやや南側に付設され、突出した形態である。検出段階では黄白色粘土や焼土塊を認めることができたが、袖部や焚口などの構造が判然としなかったため、一部断ち割りを実施した。結果、両袖の基底部が一部残存し、地山に造り付けていた状況を確認できた。ま

た、袖部の周囲には小礫が複数散在しており、カマドの構築材として用いられた可能性も考えられる。硬化面は床面中央の東側に認められ、特にカマド前面付近の硬化が顕著であった。埋土内からは土師器の坏・碗・甕の細片や須恵器の蓋・坏・甕及び基石と思われる円礫などが出土している。

S I 5（第9・10図）

調査区西側で検出した。遺構の大部分は調査区外へ広がることから詳細については不明な点が多いが、平面形は方形、あるいは長方形を呈すると推測される。検出規模は長軸2.4m×短軸1.4m程を測り、床面までの深さは約8cmと残存状況が悪い。埋土は黒色土で、暗褐色の地山ブロック土を少量含んでいた。

建物内では壁溝や柱穴を確認することができな

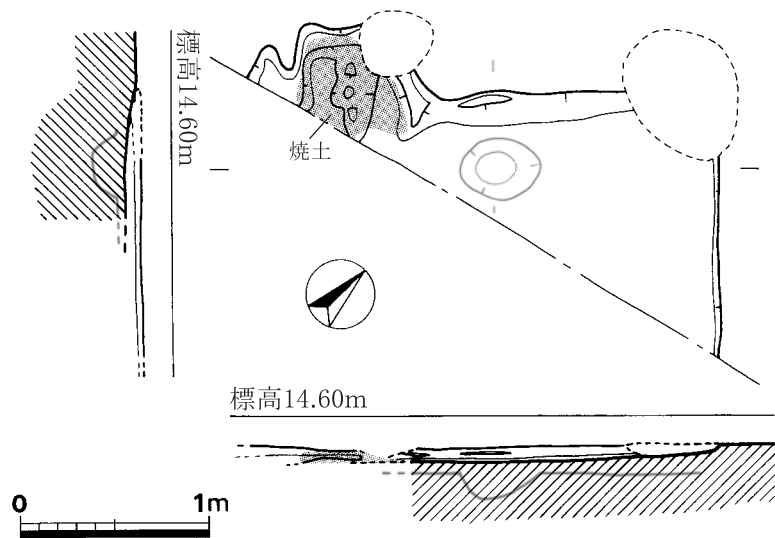


第8図 S I 1カマド土層断面図（1/20）



第9図 S I 5床面検出状況（北西から）

かったが、カマドを検出した。
カマドは北壁に設けられ、突出した形態である。燃焼部と考えられる位置には焼土が厚く堆積し、その下部は最深部で10cm程度掘り込まれていた。支脚を据えるためのものと推測される。なお、粘土などのカマド構築材を認めることはできなかった。埋土内からは土師器の坏・甕片および黒色土器A類の細片が出土している。

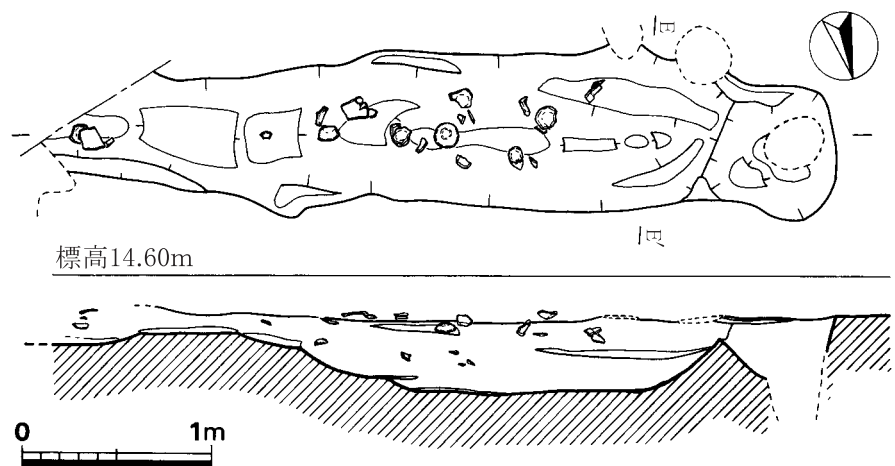


第10図 S I 5実測図 (1/40)

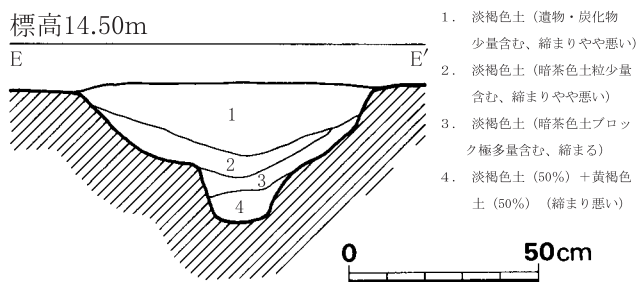
溝

SD10 (第11～13図)

調査区西端で検出した東西方向の溝で、S I 1に後出する。調査区壁から約4m西へ伸びたところで途切れる。上面幅は60～90cm程度、底面幅も10～30cmと一定ではない。深さも10～40cmと高低差が顕著である。全体像が不明なため推定の域を出ないが、規模が一定でないことと、西端部分と中央部分が土坑を掘り込んだような形で確認されたことから、連続土坑状



第11図 SD10実測図 (1/40)



第12図 SD10土層断面図 (1/20)

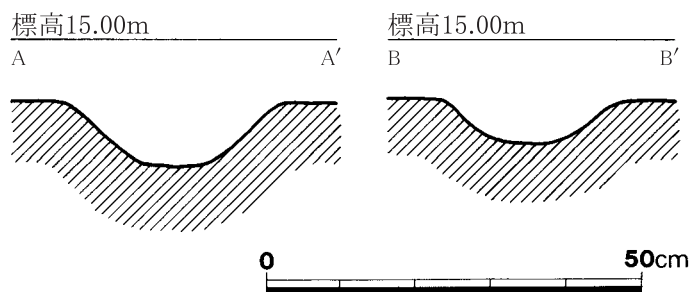


第13図 SD10完掘状況（南東から）

の溝の可能性がある。埋土は主に北側からの流入が認められ、多くの遺物が主に上層から出土している。出土遺物には土師器坏・埴・甕、黒色土器A類埴・黒色土器B類細片、須恵器坏・鉢・壺・甕、緑釉陶器細片・輸入陶磁器片、古瓦片、鉄釘などがある。

S D15 (第14図)

調査区東端で検出した南北方向の溝である。一部調査区外に及ぶが、南北端部を確認できた。長さは約7.3mである。上面幅は20cm～30cmで、底面幅は約10cmを測る。深さは5～10cmで、断面は逆台形を呈する。底面レベルは南側から北側に向かって緩やかに傾斜している。埋土内からは土師器坏・埴・甕の細片と須恵器坏の細片が出土した。



第14図 S D15断面図 (1/10)

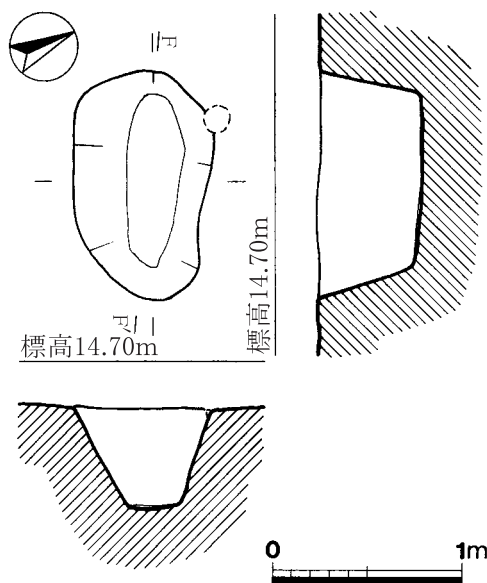
土坑

S K20 (第15～17図)

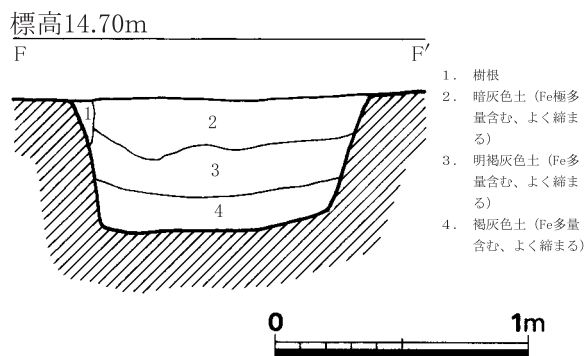
S I 5 の東側約2.5mで確認した。平面形は東西に長い不正形であり、規模は長軸が1.2m、短軸が約0.6～0.7mを測る。深さは50cm程度で、床面はほぼフラットである。埋土は大きく3層からなり、灰色系の土がレンズ状に堆積していた。また、いずれの層も鉄分を極めて多く含んでおり、非常によく締まった埋土であった。埋土内からは土師器の細片が1点のみ出土している。



第16図 S K20完掘状況 (南東から)



第15図 S K20実測図 (1/40)

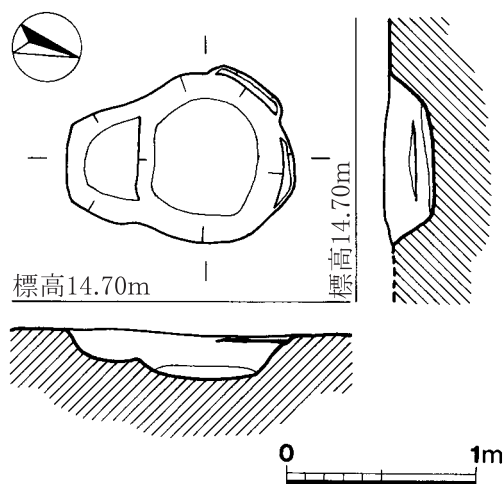


第17図 S K20土層断面図 (1/30)

1. 樹根
2. 暗灰色土 (Fe極多量含む、よく締まる)
3. 明褐色土 (Fe多量含む、よく締まる)
4. 褐色土 (Fe多量含む、よく締まる)

SK25 (第18・19図)

調査区の中央やや西寄りで検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸長が1.2m、短軸長が0.6～0.9mである。土坑内南側にはステップを有し、深さはステップ部分で15cm、底面で25cm程を測る。埋土は淡黒色土の単層で、橙色・暗褐色を呈する粒状・ブロック状の粘土と炭化物を含んでいた。埋土内からは土師器の坏・埴・甕の細片、須恵器の細片、古瓦片及び鉄釘が出土している。



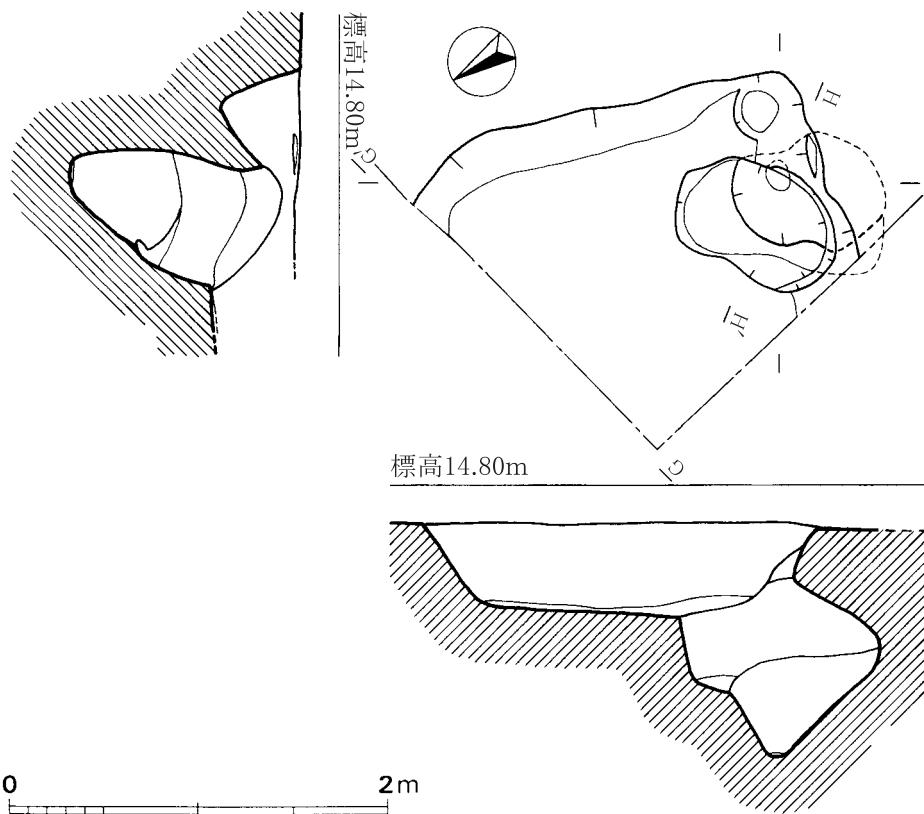
第18図 SK25実測図 (1/40)



第19図 SK25完掘状況 (西から)

SK30 (第20～23図)

調査区のほぼ中央で確認した。一部調査区外に広がるため全容は不明であるが、平面形は方形あるいは長方形と思われる。規模は東側の上端が2.1m、南側が1.1mである。深さは約50cmを測り、底面はほぼフラットである。埋土は黒色系の土を主体とし、地山の粒状・ブロック状の粘土を含んでいる。



第20図 SK30実測図 (1/40)



第21図 SK30完掘状況（北から）

また、下層では床面から僅かに浮いた状態で焼土・炭化物を含む層が堆積していた。土坑内では、南壁から大きくオーバーハングする柱穴を検出した。平面形は長楕円形を呈し、規模は60～90cmを測る。深さは遺構検出面から1.2mである。断ち割りを実施した結果、柱痕を確認した。径は25cm程度で、柱は北西方向から斜めに据えられていたと考えられ、その傾斜角度は 51° を測る。埋土は柱痕の上部に黒色土が、下部に裏込めとなる粘土と柱のずれによって生じた隙間に流入したと思われる黒色土が認められた。なお、土坑埋土と柱穴内の黒色土が類似することから土坑に伴うものと判断した。土坑埋土内からは土師器の坏・埴・甕、黒色土器A類、須恵器の坏・壺・甕、土鍾が出土し、柱穴内からは土師器の坏・甕が出土している。

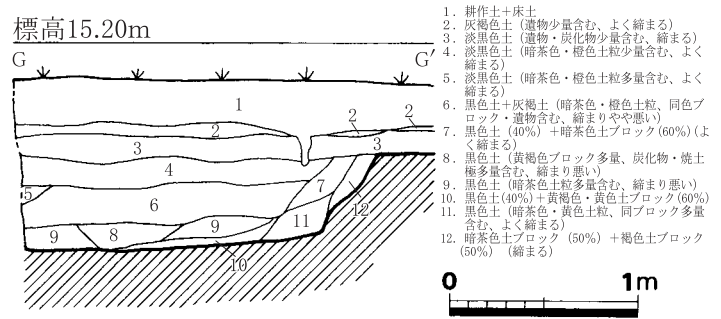
ピット

SP40（第24図）

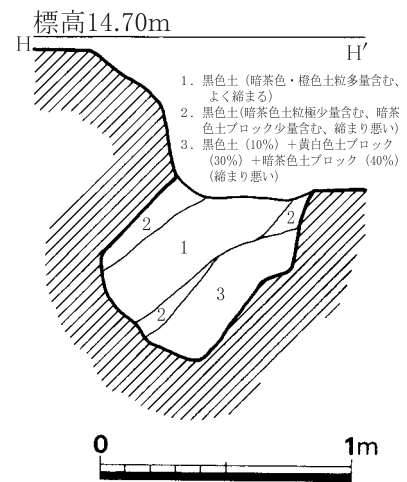
調査区東端で検出した。平面形は楕円形で、径は45cm前後を測る。深さは42cmで、底面はレンズ状を呈する。壁面は緩やかに立ち上がった後、外傾して上端へ至る。上層から土師器の甕、須恵器の坏が出土した。

3. 出土遺物

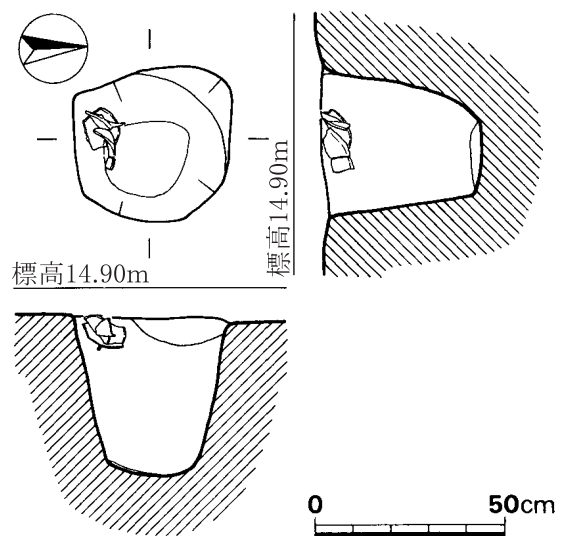
今回の調査は、遺構が疎らであったため、出土遺物は少なく、総量はパンコンテナ5箱程であった。土師器、須恵器を中心に、黒色土器、緑釉陶器、輸入陶磁器、古瓦、鉄製品、土製品などが出土している。紙面の都合上、遺物の詳細については第2・3表を参照されたい。



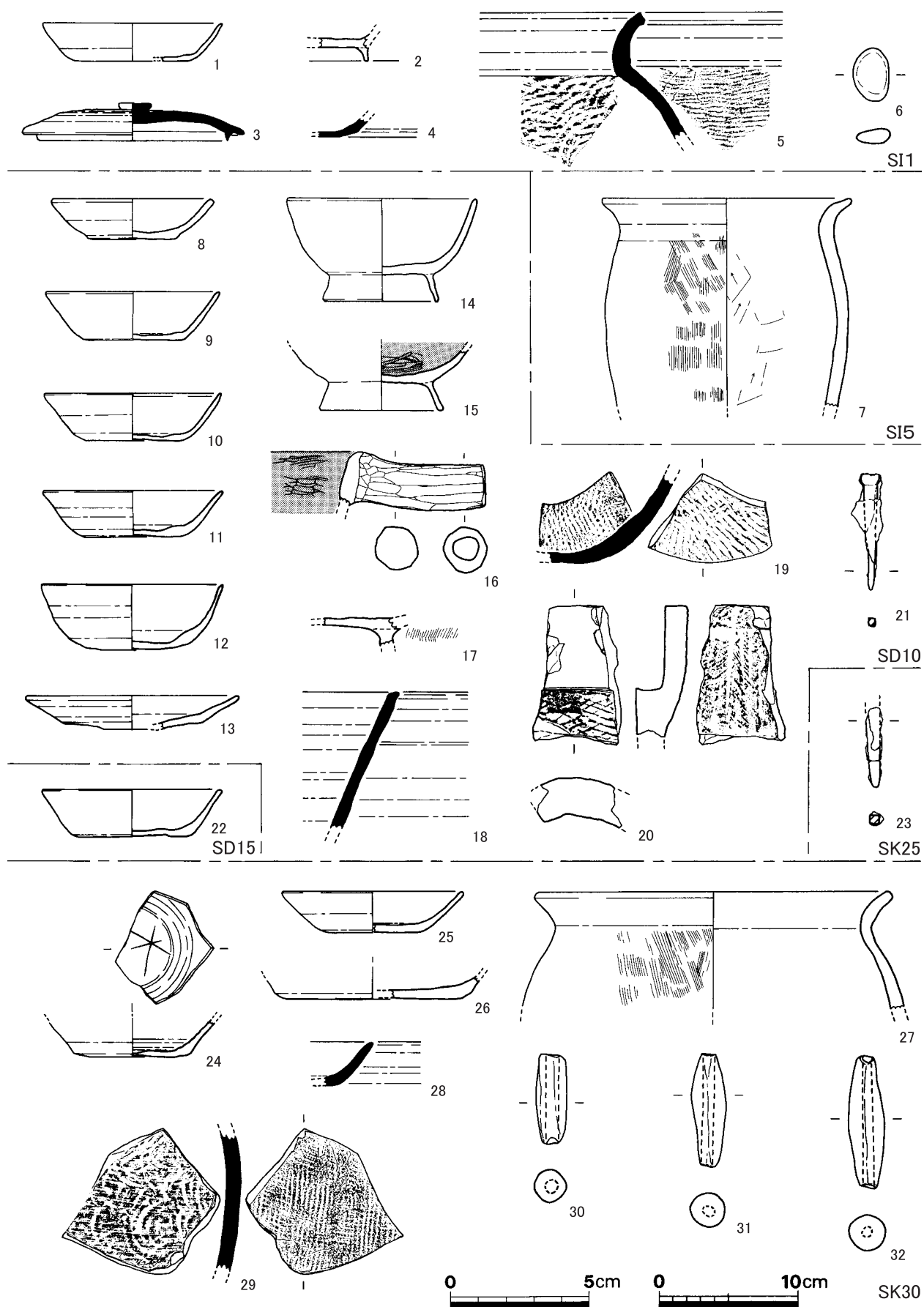
第22図 SK30土層断面図（1/40）



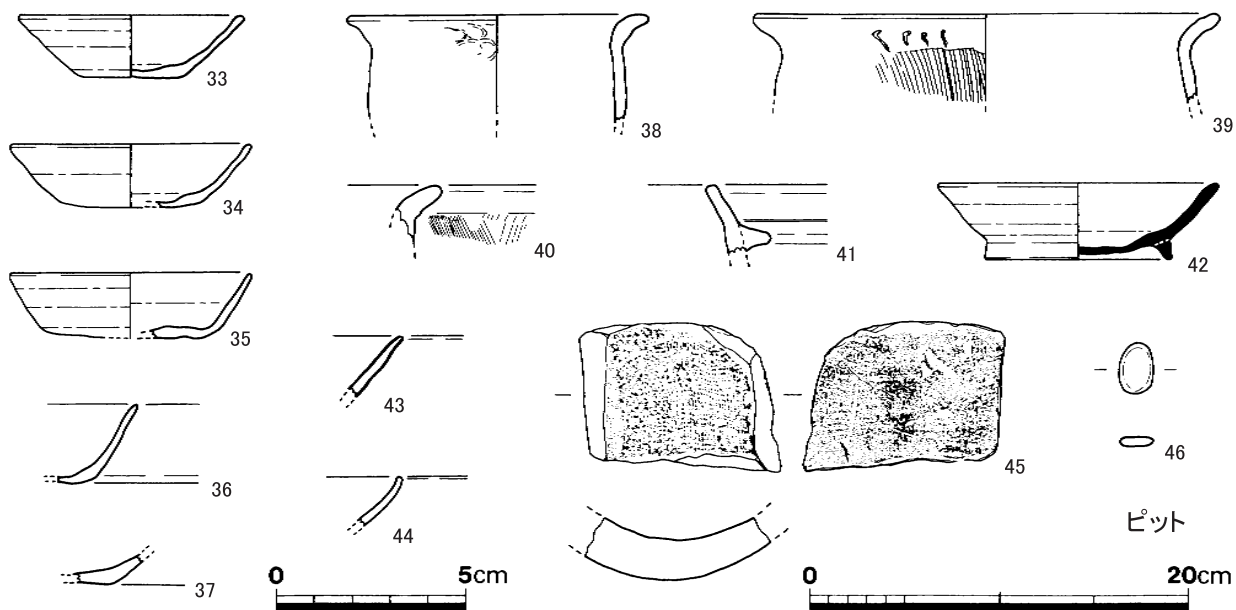
第23図 SK30内ピット土層断面図（1/30）



第24図 SP40実測図（1/20）



第25図 出土遺物実測図① (1/2・1/4)



第26図 出土遺物実測図② (1/2・1/4)

第2表 出土遺物観察表①

遺物 NO	出土 遺構	種 別	器 形	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録 番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
1 第25図	S I 1	土師器	坏	(13.0)	(7.8)	2.75	にぶい 黄橙	灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	細砂粒(金雲母)、3mm以下 赤色粒子含む		201104 000018
2 第25図	S I 1	土師器	碗	—	—	(2.0)	橙	橙	ヘラ切り	回転ナデ? ナデ?	細砂粒(石英・長石・金雲 母)含む		201104 000019
3 第25図	S I 1	須恵器	蓋	16.0	13.75	2.75	灰	灰	回転ヘラ ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	少量の砂粒(長石・石英な ど)含む		201104 000016
4 第25図	S I 1	須恵器	坏	—	—	1.35	灰白	灰白	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ? ナデ?	精良 微砂粒(黒色粒子) 含む	底部外面 板状圧痕有	201104 000021
5 第25図	S I 1	須恵器	甕	—	—	9.2	灰～橙	灰	回転ナデ タタキ	回転ナデ 当て具痕	精良 微砂粒(長石・黒色 粒子)含む		201104 000017
6 第25図	S I 1	石製品	基石	1.95	1.3	0.5	暗緑灰					蛇紋岩	201104 000020
7 第25図	S I 5	土師器	甕	(18.0)	—	(15.15)	浅黄橙～ 灰黄褐	浅黄橙	回転ナデ 刷毛目	回転ナデ ケズリ	細砂粒(金雲母)、少量の3 mm以下石英・長石含		201104 000023
8 第25図	S D 10	土師器	坏	(11.8)	(6.4)	3.0	橙	橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	細砂粒(長石・金雲母)、多 量の3mm以下赤色粒子含む		201104 000026
9 第25図	S D 10	土師器	坏	(12.6)	7.35	3.55	橙	橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	精良 微砂粒(金雲母・赤 色粒子)含	底部外面 板状圧痕有	201104 000036
10 第25図	S D 10	土師器	坏	12.85	7.25	3.45	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	微砂粒(金雲母・赤色粒 子・黒色粒子)含む	底部外面 板状圧痕有	201104 000028
11 第25図	S D 10	土師器	坏	(13.0)	(7.6)	3.4	橙	橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	微砂粒(長石・金雲母)、多 量の3mm以下赤色粒子含む		201104 000029
12 第25図	S D 10	土師器	坏	(13.15)	(7.45)	4.75	橙	橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	微砂粒(長石・金雲母)、多 量の3mm以下赤色粒子・黒 色粒子含		201104 000030
13 第25図	S D 10	土師器	皿	(15.5)	(10.0)	2.45	橙	橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良 微砂粒(金雲母)含む	底部外面 板状圧痕有	201104 000034
14 第25図	S D 10	土師器	碗	(13.8)	8.4	(7.5)	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラケズリ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良 微砂粒(長石・金雲 母)含む		201104 000027
15 第25図	S D 10	黒色土器 A類	碗	—	8.7	(4.45)	明黄褐	黒	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ後 ミガキ	微砂粒(金雲母)、3mm以下 赤色粒子含む		201104 000031
16 第25図	S D 10	土師器	把手	—	—	(4.3)	黒～橙	黒	面取り	ミガキ	微砂粒(長石・金雲母)、3 mm以下赤色粒子含む		201104 000032
17 第25図	S D 10	土師器	鉢?	—	—	(1.6)	灰褐	にぶい橙	刷毛目 ナデ?	回転ナデ?	極多量の3mm以下石英・長 石・赤色粒子含む		201104 000035

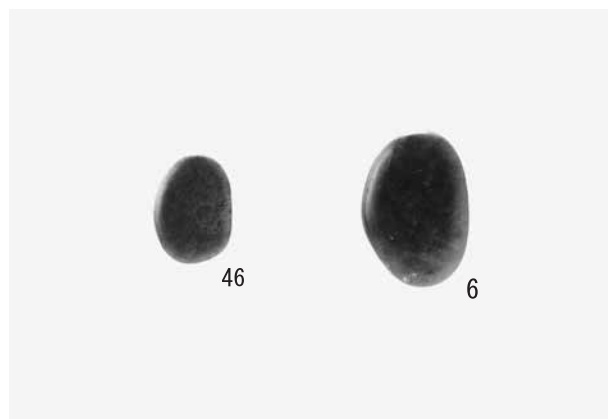
第3表 出土遺物観察表②

遺物 NO	出土 遺構	種 別	器 形	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録 番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
18 第25図	S D 10	須恵器	鉢	—	—	(9.95)	浅黄	灰黄	回転ナデ	回転ナデ	精良 微砂粒(長石)含む		201104 000037
19 第25図	S D 10	須恵器	甕	—	—	(6.45)	褐灰	灰オリーブ	タタキ	当て具痕	多量の5mm以下石英・長石含む		201104 000038
20 第25図	S D 10	瓦	丸瓦	(10.15)	(6.4)	2.7～1.6	灰黄褐	にぶい黄橙	斜格子	布目	精良		201104 000033
21 第25図	S D 10	鉄製品	釘	4.25	1.45～ 0.1	0.25						頭部屈曲	201104 000039
22 第25図	S D 15	土師器	坏	(13.0)	(8.7)	3.45	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ ヘラ切り後 ナデ?	回転ナデ ナデ	精良 微砂粒(金雲母)含む	底部外面 板状圧痕有	201104 000040
23 第25図	S K 25	鉄製品	釘	(2.9)	0.35～ 0.4	0.35							201104 000041
24 第25図	S K 30	土師器	坏	—	(8.4)	(2, 75)	橙	橙	回転ナデ ヘラ切り後 ナデ?	回転ナデ ナデ	精良 微砂粒(長石・金雲母)含む	底部内面 線刻有	201104 000045
25 第25図	S K 30	土師器	坏	(13.2)	(6.9)	3.0	橙～灰黄褐	橙～灰黄褐	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	微砂粒(金雲母)、多量の 3mm以下赤色粒子含む		201104 000049
26 第25図	S K 30	土師器	坏	—	(12.6)	(1.7)	橙	橙	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	精良 微砂粒(金雲母・赤 色砂粒・黒色砂粒)含む		201104 000050
27 第25図	S K 30	土師器	甕	(26.0)	—	(8.45)	にぶい黄褐 ～黒	浅黄橙～ にぶい黄	回転ナデ 刷毛目	回転ナデ ケズリ	精良 微砂粒(石英・長 石・金雲母)含む	外面スス 付着	201104 000043
28 第25図	S K 30	須恵器	坏	—	—	3.15	灰	灰	回転ナデ ヘラ切り?	回転ナデ ナデ?	精良 微砂粒(長石・金雲母)含む		201104 000046
29 第25図	S K 30	須恵器	甕	—	—	10.15	灰白	灰白	タタキ	当て具痕	精良 微砂粒(長石・黒色 粒子)含む		201104 000048
30 第25図	S K 30	土製品	土錘	1.7	1.2	1.15	にぶい橙 ～褐灰						201104 000047
31 第25図	S K 30	土製品	土錘	4.1	1.2	1.2	浅黄褐						201104 000042
32 第25図	S K 30	土製品	土錘	2.8	1.3	1.3	にぶい黄橙						201104 000044
33 第26図	SP133	土師器	坏	(12.0)	(7.2)	3.3	にぶい黄橙	にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	細砂粒(金雲母・赤色粒 子・黒色粒子)含む		201104 000013
34 第26図	SP141	土師器	坏	(12.8)	(7.2)	3.35	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	微砂粒(金雲母・黒色粒 子)含む		201104 000014
35 第26図	S P 9	土師器	坏	(12.05)	(8.0)	3.45	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良 細砂粒(石英・金雲母)含む		201104 000002
36 第26図	S P 32	土師器	坏	—	—	4.2	にぶい橙	橙	回転ナデ ヘラ切り?	回転ナデ ナデ?	精良 微砂粒(石英・金雲母)含む		201104 000003
37 第26図	S P 85	土師器	坏	—	—	(1.65)	橙	橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	細砂粒(石英・金雲母・赤 色粒子)含む		201104 000010
38 第26図	S P 40	土師器	甕	(16.0)	—	(5.75)	橙～ にぶい黄橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒(石英・金雲母)、多 量の3mm以下長石・黒色粒 子含む	外面スス 付着	201104 000006
39 第26図	S P 2	土師器	甕	(24.8)	—	(4.7)	灰黄褐	にぶい黄橙	回転ナデ 刷毛目	回転ナデ ケズリ	砂粒(石英・長石・金雲母・赤 色粒子)含む		201104 000001
40 第26図	S P 32	土師器	甕	—	—	(3.3)	明赤褐～ 灰黄褐	橙	回転ナデ 刷毛目	回転ナデ ナデ	多量の細砂粒(石英・長石・ 金雲母・黒色粒子)含む		201104 000004
41 第26図	S P 85	土師器	釜	—	—	(3.6)	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	精良 細砂粒(金雲母)含む	外面スス 付着	201104 000011
42 第26図	S P 40	須恵器	埴	(14.8)	(9.8)	4.05	灰白	灰白	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良 微砂粒(金雲母)含む		201104 000007
43 第26図	S P 65	青磁	碗	—	—	3.25	オリーブ黄	オリーブ黄	施釉	施釉	精良 微砂粒(黒色粒子)含 む	越州窯系 Ⅱ類	201104 000009
44 第26図	SP218	青磁	碗	—	—	(2.65)	灰白	灰白	施釉	施釉	精良 微砂粒(黒色粒子)含 む	越州窯系 釉剥落	201104 000015
45 第25図	S P 35	瓦	平瓦	(7.9)	(10.65)	2.3	にぶい橙	にぶい橙	縄目擦消し	布目	精良		201104 000005
46 第26図	S P 54	石製品	基石	1.4	0.85	0.3	緑黒					蛇紋岩	201104 000008

※輸入陶磁器の分類は、太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊X V－陶磁器分類編一』太宰府市の文化財第49集による。



第27図 出土遺物（写真①）



第28図 出土遺物 (写真②)

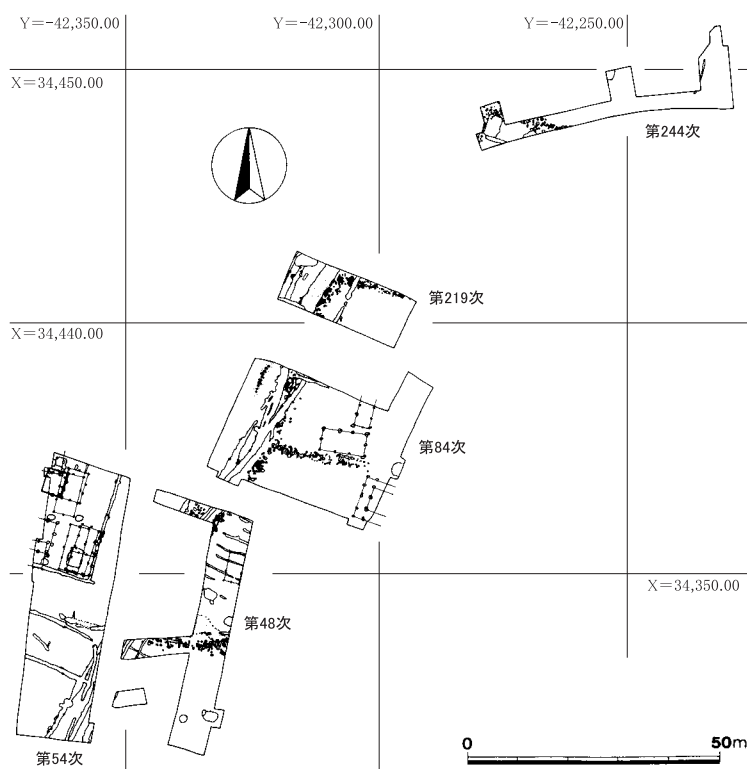
IV. まとめ

本調査は、宅地造成に先立つ事前の発掘調査である。今回は対象地内に敷設される道路部分の約350㎡について調査を実施した。結果、竪穴建物2棟、溝2条、土坑3基、及びピット群を検出できた。ここでは周辺の調査成果と合わせ、今回の調査で得られた所見を遺構ごとにまとめた。

まず、竪穴建物はS I 1が7世紀後半に位置付けられる。S I 1では特殊遺物は出土していないが、筑後国府跡とその周辺の遺跡では、平面形が長方形を呈する竪穴建物は工房など特異な性格を有するものが含まれることが指摘されている（註1）。S I 1が営まれた7世紀後半は、前身官衙や高良山神籠石が造営・機能した時期であり、想像を逞しくすれば、その時期における工人・官人達の宿舍などの性格が想定できる。次に、溝はS D10が9世紀後半、S D15が9世紀前半に埋没したと思われる。前者はその形態から排水溝とは考えがたく、何らかの区画溝として機能したと考えられる。後者は有機的に関連する遺構を確認できていないため、性格までは明らかにできなかった。土坑はS K30が9世紀前半、S K20・25が出土遺物に恵まれなかったため詳細不明である。S K30はいわゆる「方形土坑」と思われ、その機能は先学が指摘するように、半地下式の倉庫と考える（註2）。筑後国府跡では第121・133次調査などに類例が求められ、近隣に所在するへボノ木遺跡・二本木遺跡・安養寺境内遺跡などにおいても確認されている。但し、S K30は12～13世紀と考えられるそれらとは所属時期が異なり、また、大きく傾斜をつけた柱穴を伴うなど上屋の構造上においても差異が認められる。類例の増加を待つとともに、今後十分な検討が必要である。最後に、ピット群は出土遺物と埋土の特徴から主に8～9世紀の所産と思われる。これらの一部は柱穴列を用いた区画施設を構成するものと考えられ、過去の

調査成果から区画施設は調査地南側に展開する可能性が高い（註3）。その規模は東西幅が不明であるが、南北幅が約35～40mで、同様の規模を測る施設が南北方向に連なっているようである。今回の調査では区画内部の様相について明らかにすることはできなかったが、同様の施設の抽出とともに、今後の課題とし、その性格の把握にも努めていきたい。

（註1）神保公久「筑後国府と周辺の竪穴建物」『古文化談叢』第65集 2011 （註2）小澤太郎「安養寺境内遺跡（第1次）」『久留米市文化財調査報告書』第180集 2002 （註3）神保公久「筑後国府跡第219次調査報告書」『久留米市文化財調査報告書』第259集 2007



第29図 第244次調査地周辺の主要遺構模式図 (1/1,500)

報告書抄録

ふりがな	ちくごくふあと だい244じはつくつちょうさほうこく		
書名	筑後国府跡 ー第244次発掘調査報告ー		
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書		
シリーズ番号	第311集		
編著者名	廣木 誠		
編集機関	久留米市役所 市民文化部 文化財保護課		
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 TEL:0942-30-9225 FAX:0942-30-9715 Email:bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp		
発行年月日	平成24年(2012)2月29日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
			市町村	遺跡番号					
ちくごくふあと 筑後国府跡 第244次調査	くるめし 久留米市 あいゆわまち 合川町178-3、179-1		40203	30112	33° 18′ 47″	130° 32′ 37″	20110524 ～20110701	350㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
筑後国府跡 第244次調査	官衙	奈良 ～平安	堅穴建物 溝 土坑 ピット		2棟 2条 3基 多数	土師器、須恵器、黒色 土器、緑釉陶器、輸入 陶磁器、古瓦、土錘、 石製品、鉄製品、	前身官衙期に並行する堅 穴建物に加え、9世紀代 の方形土坑も確認してい る。また、筑後国府域に 展開する区画施設を構成 する柱穴列を検出してい る。		
要 約									
第244次調査地は、筑後国府Ⅱ期政庁に付随する国司館（9世紀）の東側約200m付近にあたる。今回の調査では、前身官衙期に並行すると考えられる堅穴建物や、筑後国府内では検出例が少ない9世紀代の方形土坑を検出することができた。また、周辺の調査で柱穴列からなる圍繞施設が確認されているが、今回の調査でもそれらを構成すると考えられるピット列を検出することができるなど、貴重な成果を得ることができた。									
土木工事の届出日		平成22年11月10日				遺物の発見通知日		平成23年7月5日 (23 文財第349 号)	

筑後国府跡

ー第244次発掘調査報告ー

久留米市文化財調査報告書 第311集

平成24年2月29日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印刷 中村印刷株式会社